

Title	動詞小詞結合と有標語順
Author(s)	竹鼻, 圭子
Citation	Osaka Literary Review. 19 P.27-P.40
Issue Date	1980-11-30
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25618
DOI	10.18910/25618
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

動詞小詞結合と有標語順¹⁾

竹 鼻 圭 子

0. 序

いわゆる動詞小詞結合 (verb-particle combination) は二語動詞 (two-word verb) とも呼ばれることからわかるように、機能的には一つの動詞としての働きを持ちながら、形式上は動詞と小詞の2語からなる連鎖である。この結合自体については、Kennedy (1920), Bolinger (1971) や Fraser (1974) にくわしいが、ここでは小詞が文の通常的位置から動いた、いわゆる有標語順 (marked word order) を文脈あるいは語用論的観点から考察することにする。

文の動詞部分が動詞小詞結合である文には次例にあるような二種類の有標語順がある。

(1) Particle Movement²⁾

- a. He looked over the client.
- b. He looked the client over.

(2) Directional Adverb Preposing

- a. John raced in.
- b. In raced John.

(1b)や(2b)にあるような有標語順を文脈の視点から考察するにあたって、いわゆる既知 (given) (あるいは旧情報 (old)) とそれに対する新情報 (new) (あるいは未知 (unknown)) という概念が必要である。これらの概念はまずプラーグ学派の Mathesius らによって、'Functional Sentence Perspective' と銘うって使われ、その後 Chafe や Halliday, Kuno などが用いて来ている。この概念は今のところ明確に定義されているわけではないが、文脈を言語学的に研究しようとする場合、不可欠なものである。こ

では既知という概念を基本的にはある項目が聴き手にとって既知であり、その結果照応的に用いられる場合、言いかえると定名詞句や代名詞で表わされ、文強勢をとまなわれない場合に限って用いることとする。

1. Particle Movement

Particle Movement が語用論上問題となってくるのは、小詞の位置がある文の文強勢の位置や、焦点の位置と何らかの関係を持つ場合である。小詞は例(1)にあるように、直接目的語の前にも後ろにも来うるが、この現象は直接目的語が代名詞である場合には、動詞+名詞句+小詞の連鎖が義務的となる。それに加えて、間接目的語を持つ構造における次のような現象は、純粋に統語的な規則であるように見える。すなわち、Fraser (1974) によれば、直接目的語が代名詞でない限り、小詞は直接目的語と間接目的語との間に来るとは無い——(3)、そして、間接目的語移動規則³⁾は、その文の動詞が動詞小詞結合である場合には適用されない——(4)。

- (3) a. The man gave out the money to the poor.
 b. * The man gave the money out to the poor.
 c. The man gave it out to the poor.
- (4) a. The man gave the poor the money.
 b. * The man gave out the poor the money.

しかし、小詞の位置に関与する文法規則は、上述のように単純で、統語的に容易に定義可能なものではない。まず、微妙なところでこういった小詞の位置の文法性についての意見が分かれるという事実をあげなければならない。Emonds (1972) や Bolinger (1971) が言っているように、二重目的語を持つ文に小詞がある場合、一番良いとされる小詞の位置は、その2つの名詞句の間である。そして他の位置に小詞が来うるかどうかは確かではなく、この点については話者によって文法性についての判断が必ずしも一致しない。だから (5a) は完全に文法的であるが、(5b) (5c) についての判断は大きく分かれている。

- (5) a. We sent the subscribers out a notice.
 b. ? She showed off her friends her new dress.
 c. ? He cabled his boss the message in.

これは Fraser の「動詞が動詞小詞結合である場合には、間接目的語の移動規則は適用されない」という記述に反している。また、Tsubomoto (1978) が観察しているように、当該の名詞句が話題 (topic) であるかないかということが、その文における小詞の位置と密接な関係を持っている。すなわち、間接目的語が話題であり、間接目的語移動規則が適用される場合、小詞の位置は、前述のように2つの名詞句の間が良いとされるが、(6a) (7a)、動詞の後ろに来ると文法性が落ち、(6b) (7b)、2つの名詞句の後に来ることはない、(6c) (7c)。

- (6) a. The secretary sent the stockholders *out* a schedule.
 b. ? The secretary sent *out* the stockholders a schedule.
 c. * The secretary sent the stockholders a schedule *out*.
- (7) a. A clerk will type John *out* a permit.
 b. ? A clerk will type *out* John a permit.
 c. * A clerk will type John a permit *out*.

このような観察から、Particle Movement を記述するには、動詞小詞結合に後続する文の要素の統語構造ばかりでなく、それらによって構成される動詞句の音調上の形式も関係するということが仮定できよう。そこで、これから Fraser (1974) によって提示された次のような音調形式についての事実にもとづいて、小詞の位置についての制限を考察してみようと思う。

- (8) i) The intonation center of the English verb phrase is normally on the final constituent.
- ii) The particle usually receives a heavier stress than does the verb with which it is associated and a heavier stress than the direct object when the particle follows it.
- iii) Pronouns do not receive stress unless contrastively stressed.

まず第一に、文強勢が動詞句の最後に来るために、代名詞が目的語である場合、動詞+名詞句+小詞の連鎖が義務的になるのだと考えられる。たとえば、

- (9) He smiled at this, looking a little more conscious. “You *get everything out*.” For a moment again their eyes met. “You *put everything in*! . . . (Henry James, *The Ambassadors*, p.54)

この連鎖は、out と in を対照させ、行為自体に注意を向けさせるためにも必要であると考えられる。

第2に、強勢を担った代名詞は、意味の比重が大きくなるので、上記の代名詞についての制約が働かなくなる。たとえば、

- (10) a. . . . , and it was here she presently checked him with a question. “Have you *looked up* my name?” He could only stop with a laugh. “Have you *looked up* mine?” (ibid., p.22)
- b. . . . she was arranging for his absence, told him who would *take up* this and who *take up* that exactly where he had left it, . . . (ibid., p.60)
- c. “That’s what I *found out* from the young man.”
 “But I thought you said you *found out* nothing.”
 “Nothing but that — that I don’t know anything.”
 (ibid., p.72)
- d. “You must *find out*.” It made him almost turn pale. “*Find out* any *more* [italics in the original]?” He had dropped on a sofa for dismay; but she seemed, . . . , to have the last word. “Wasn’t what you came out for to *find out* all [italics in the original]?” (ibid., p.118)

第3に、直接目的語が非常に短い場合には、小詞は動詞の後ろに来る——(11a)、その理由はたぶん英語の強勢配分はふつう強い強勢が続いて起こることを許さないからであろう。しかし、これは名詞句が意味的に軽く、先行する文脈のある名詞句と照応関係を持って、代名詞のような機能

を持つ場合には、適用されない—— (11b)。

- (11) a. This gave Miss Gostrey a grasped opportunity to *back up* Waymarsh at his expense. (ibid., p.38)
- b. Taking his way over the street at last and passing through the porte-cochere of the house was like consciously *leaving* Waymarsh *out*. (ibid., p.70)

第4の制約は例(12)にあるような、単純現在時制や単純過去時制による動詞の習慣的な意味の用法に関するものである。この場合、小詞が直接目的語の後ろに来ると、奇異な文となる。この理由は、小詞が文末に来て、強勢を担うことによって、小詞によって表わされる意味が強調されて、動詞小詞結合がもはや習慣的な意味を持たず、瞬時の行為を表わすことになってしまうということではないだろうか。

- (12) a. The police *track down* criminals.
- b. The cook *washed up* the plates.
- c. Impudent children *sass back* some teachers.

第5の制約は、直接目的語が既知の情報、あるいは、旧情報を担っているかどうかに関係することである。直接目的語が既出であったり、その場の状況においてわかりきっているような内容である場合、小詞はその名詞句の後ろに来るのだが、例(13)には新情報と旧情報とが対照的に観察される。

- (13) a. “Her condition doesn’t matter? Surely not; we *leave* her condition *out*; we take it, that is, for granted. . . .” (Henry James, *The Ambassadors*, p.47)
- b. If the girl’s twenty — and she can’t be less — the mother must be at least forty. So it *puts* the mother *out*. *She’s* [italics in the original] too old for him. (ibid., p.116)
- c. Chad had at any rate *pulled* his visitor *up*; he had even *pulled up* his admirable mother; he had absolutely, . . . , *pulled up*, in a bunch, Woollett browsing in its pride. (ibid., p.116)

- d. The flimsy string broke and some of the contents rolled over the floor. Christine exclaimed: "What have you been buying candles for?"

But to Linda's relief she did not wait for an answer, but went on, as she helped to *pick* the things *up* from the floor: . . .

(Agatha Christie, *Evil Under the Sun*, p.43)

第6に、直接目的語が長く、複雑である場合には、小詞はその名詞句の後ろに来ることができない——(14)。

- (14) a. ? I *called* the man who left *up*.
 b. ? The ogre *ran* the sweet innocent little children *down*.
 c. ? The crooks *bumped* the man returning from the movie *off*.

しかし、Fraser は名詞句が小詞をその後ろにとるには「複雑」すぎるかどうかを決定する要因は、長さだけではないとしている。名詞句のなかに下降抑揚があるかどうかによって決定される、すなわち、下降抑揚がある場合には、小詞は必ず動詞の後ろに来なければいけないというのである。たとえば(15)の例にある5語の名詞句はその内部に下降抑揚を持たないが、(14)の例にある名詞句は、内部の要素間の構造のために、抑揚の降下が起こる(たとえば、(14a)の the man の後など)。

- (15) a. He *called* all of my best friends *up*.
 b. Won't you *total* some of those larger figures *up*?
 c. Some *charged* the adding machine fire-loss *off* to experience.

しかし、次例にあるように、前述の下降抑揚の規則に対して反例をあげることができる。(16a)では挿入句 as I've told you の前後に、また(16b)では名詞句の内部にコンマで示される抑揚の降下がある。

- (16) a. I *take* people, as I've told you, *about*.
 (Henry James, *The Ambassadors*, p.26)
 b. . . . so that all he could do was — by way of doing something — to say "Merci, Francois!" *out* quite loud when his finish was brought. (ibid., p.71)

最後に、Fraser もふれているように、動詞小詞結合を含むイディオムのなかには、小詞が特定の位置をとるものがある。一部を (17) に例示する (Fraser (1974) による)。

- (17) a. bite off one's head
get up one's energy
kick over the traces
pluck up courage
take up heart
knock off work
stir up trouble
close up shop
shut up shop
screw up one's courage
dance up a storm
blow off steam
- b. tear (out) one's (out)
put (on) some weight (on)
lay (down) the law (down)
bring (down) the house (down)
put (on) one's thinking cap (on)
throw (in) the towel (in)
turn (back) the clock (back)
- c. have Friday off
take Friday off
boss someone about
knock someone out
bundle someone off
eat one's head off
work someone's tail off
let one's hair down
put one's foot down

この事実は、動詞小詞結合の機能はイディオムとしての性格が強いことを示している。

このように見てくると、最終的には、動詞句の音調上の形式が、その動詞句が動詞+名詞句+小詞という連鎖をとりうるかどうかを決定する主な要因であるということがいえよう。しかしながら、ここで、抑揚や文強勢は、話者が表現しようとしていること、すなわちいわゆる命題と密接に関係していることと、音調規則が小詞の位置の妥当性を決定する以前に、当該の文や文脈を流れる意味のつながりがその妥当性を決定するのだということに注意しなければいけない。したがって、以上の考察から、イディオム的な用法を除いては、当該の名詞句が旧情報であるか、または当該の動詞小詞結合の示す行為が大きな情報価値を持っているということを、動詞+名詞句+小詞の連鎖が示しているということが言えよう。

2. Directional Adverb Preposing

動詞小詞結合を構成する副詞的小詞のなかで、方向の意味解釈が成りたつもののみが、文頭に來うる。(18)と(19)を比較すれば、このことは明らかであろう。

- (18) a. He raced in.
 b. In he raced.
 c. The ball rolled down.
 d. Down rolled the ball.
 e. The monkey climbed up.
 f. Up climbed the monkey.
- (19) a. Mary gave up (yielded).
 b. * Up gave Mary.
 c. He made out the words (understood).
 d. * Out the words he made.
 e. They fell out (quarreled).
 f. * Out they fell.

上例の (18b) (18d) (18f) にあるような小詞が前置された構造を持つ文には、いくつかの統語的な制約があることに注意してほしい。まず、文の主語が代名詞でない場合、方向を示す副詞的小詞が前置された時には、(18d) (18f) にあるように、主語と動詞の倒置がおこる。第2に、こういった文の動詞は、単純現在か単純過去でなくてはならない。

前置された方向の副詞的小詞を持つ構造を文脈あるいは語用論の立場から考察を試みようとする場合、文の名詞要素の文脈上の分析に用いられる「旧情報対新情報」という考え方だけではうまく説明し得ないようである。というのは、この場合文の前置された要素は小詞だけであり、名詞句を含まないからである。そこで、ここでは毛利 (1972) によって、'Logical Subject' と 'Logical Predicate' の概念 (以下 S と P と略す) を用いて考察することにする。その考え方は、S がある文の主題 (theme) であり、一方 P はその主題に情報を与える部分を示していると仮定すれば、文脈におけるすべての文を 'S is P' か 'P is S' のどちらかの論理構造に還元できるというものであり、したがって語順の問題を S と P から成る論理構造によって扱えるようになるわけである。たとえば、目的語+動詞+主語という語順の文が、'S is P' と還元される場合、その目的語はその文脈での論理主語として前置されているのであり、同じ文が 'P is S' と還元される場合には、その目的語は当該の文脈における論理述語であることになる。同一の語順の文が与えられた場合、その文の論理構造が 'S is P' であるか 'P is S' であるかは、表層において文のどの要素に文強勢がおかれるかで合図される。そこで、文における要素間の論理関係と、文強勢の位置との関係を考えておきたいと思う。

下の例文において、文強勢の位置は大文字で示されている。

(20) Who did your mother tell you to meet?

- a. It was MR. SMITH that she told to meet. (Cleft)
- b. MR. SMITH she told me to meet.
(Focus Topicalization)

c. *Mr. Smith, she told me to MEET HIM.
(Left Dislocation)

d. *Mr. Smith she told me to MEET.
(Topic Topicalization)

(21) What about Mr. Smith?

a. *It was MR. SMITH that she told me to meet.

b. *MR. SMITH she told me to meet.

c. Mr. Smith, she told me to MEET HIM.

d. Mr. Smith she told me to MEET.

(20), (21)にあるように, cleft 文と focus topicalization において, 文強勢は文頭の要素にあるが, left dislocation と topic topicalization においては, 文強勢は文末に来る。他方, この例にある質問—応答の関係が示しているように, cleft 文と focus topicalization の起こった文における論理構造は 'P is S' であるのに対し, left dislocation や topic topicalization の起こっている文の論理構造は, 'S is P' である。このことから, 前置された要素に文強勢がある場合, その要素はその文脈において論理的に P であり, 文強勢がない場合は, S であるといえることができる。

ここで, 文脈における方向を示す副詞的小詞の前置 (directional adverb preposing) の機能について考えてみたい。例(22)にあるように, 前置された方向を示す副詞的小詞はふつう文強勢を担う。

(22) a. . . . , we set out at four o'clock for the movies. As we stood buttoning our coats in the hall, *in came Vanaker* in his bowler and polka-dot muffler, carrying a bag in which bottles rattled. (Saul Bellow, *Dangling Man*, p.141)

b. . . . , Burning with curiosity, she [Alice] ran across the field after it [the Rabbit], and was just in time to see it pop down a large rabbit-hole under the hedge.

In another moment *down went Alice* after it, never once considering how in the world she was to get out again. (Lewis Carroll, *Alice's Adventure in Wonderland*, p.26)

- c.before her [Alice] was another long passage, and the White Rabbit was still in sight, hurrying down it. There was not a moment to be lost: *away went Alice* like the wind, and was just in time to hear it say, ... (ibid., p.29)
- d. The crow was much pleased. She opened her mouth to show the fox how well she could sing. *Down fell the cheese* to the ground. (*Aesop's Fables*, "The Fox and Crow", p.10)

こういった強勢配分が示しているように、方向を示す副詞的小詞が前置された文の、文脈における論理構造は 'P is S' である。毛利 (1972) は、Pは意味上、情報価値上、Sよりも重く、論理的述語が先行する型の構造はその述語部をより強調するために用いられると言っている。例文にもどると、"in came Vanaker" においては、in = Pで、Vanaker = Sであり、"down went Alice" においては、down = Pで Alice = Sであり、"away went Alice" においては、away = Pで Alice = Sであり、"down fell the cheese" においては、down = Pで the cheese = S ということになる。そして、ここにある come や go, fall といった動詞は文の中位にあって、意味の軽い、いわゆる連結動詞 (link-verb) に近い機能しか持っていないということが言えよう。このように、前置された方向を示す副詞的小詞は、論理的述語として機能しており、この点が他の倒置構造の機能とは異なっているわけであるが、その点についての議論は、他の機会にゆずりたいと思う。

3. 結語

これまで、副詞的小詞を含む文が有標語順を持つ場合について、「旧情報と新情報」や「論理主語と論理述語」というような概念を用いて、文脈あるいは語用論的な観点に立って論述してきたわけであるが、このような方法論は、統語論的な視点からすれば独立した事象と思われる諸問題、特

に語順の問題を統一的に扱うのに有効である。したがって、これらの概念のより明確な確立と、そのように定義された概念を使って、統語論と語用論との関連について考察を深めることが、これからの課題である。

(注)

- 1) この論文は、1980年1月、大阪大学大学院文学研究科へ提出した修士論文 *Particles and Marked Word Order* (小詞と有標語順) の第三章による。
- 2) Fraser (1974) は Particle Movement の基底構造を (NP-V-Prt-NP) としており、それに対して Emonds (1972) や Jackendoff (1973) は (NP-V-NP-Prt) を基底とする立場をとっているが、どちらの立場をとるかはここの議論には直接関係しない。
- 3) 間接目的語移動規則については、基底構造を (V-NP₁-to-NP₂) とし、to を削除することで (V-NP₂-NP₁) を導くとする立場と、逆に (V-NP₁-NP₂) から to 挿入を経て (V-NP₂-to-NP₁) を導くとする立場があるが、ここでは前者の立場をとって議論をすすめている。

参考文献

- Allerton, D.J. (1978) "The Notion of 'Givenness' and its Relations to Presupposition and to Theme", *Lingua*, 44.
- Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- _____. (1977) "Another Glance at Main Clause Phenomena", *Language* 53,3.
- Bresnan, J.W. (1971) "Sentence Stress and Syntactic Transformations", *Language* 47,2.
- Chafe, W. (1970) *Meaning and the Structure of Language*, Chicago: University of Chicago Press.
- _____. (1972) "Discourse Structure and Human Knowledge", In J.B. Carroll and R.O. Freedle, eds., *Language Comprehension and the Acquisition of Knowledge*, Winston and Sons.
- _____. (1976) "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View", In C.N. Li ed. *Subject and Topic*, Academic Press.

- Cowie, A.P. (1979) "The Syntax of the Verb-Particle Construction", *Eigo Kyoiku*, Sept.
- Emonds, J. (1972) "Evidence that Indirect Object Movement is a Structure-Preserving Rule", *Foundation of Language* 8.
- _____. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*, Academic Press.
- Firbas, J. (1964) "On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis", *Travaux Linguistique de Prague* 1.
- _____. (1966) "Non-Thematic Subjects in Contemporary English", *Travaux Linguistique de Prague* 2.
- Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*, Taishukan.
- Halliday, M.A.K. (1967-8) "Notes on Transitivity and Theme in English", *Journal of Linguistics*, 3-4.
- Jackendoff, R.S. (1973) "The Base Rule for Prepositional Phrases" In S. Anderson and P. Kiparsky eds., *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart & Winston.
- Kennedy, A.G. (1920) "The Modern English Verb-Adverb Combination", *Language and Literature*, University Series, 1.1. Stanford, California: Stanford University Publication.
- Kroch, A.S. (1979) "Review of Fraser 1974", *Language* 55.
- Kuno, S. (1971) "The Position of Locatives in Existential Sentences", *Linguistic Inquiry* 2.3.
- _____. (1973) "Functional Sentence Perspective", *Linguistic Inquiry* 4.
- _____. (1978) "Two Topics on Discourse Principles", *Bulletin of the ICU Summer Institute in Linguistics* 6.
- Nilsen, D.L.F. (1972) "Verb-Adverb Combinations", In *English Adverbials*, Mouton.
- Schmerling, S.F. (1974) "A Re-examination of 'Normal Stress'", *Language*, 50, 1.
- Tsubamoto, Atsuro (1978) *Topic of a Phrase and Dative Movement*, Handout.
- 河上誓作 (1978) 『"Locative+Verb+Subject"型文の語用論的側面』「文学研究」75, 九州大学。
- 小西友七 (1970) 「英文法研究」, 大修館。
- 松井千枝 (1978) 『前置詞の分類』「英語青年」。
- 美尾浩子 (1976) 『前置詞と語順と』「英語文学世界」。

- 毛利可信 (1954) 「語順」英文法シリーズ23, 研究社。
_____ (1972) 「意味論から見た英文法」, 大修館。
_____ (1980) 「英語の語用論」, 大修館。
成田義光 (1970) 『文の総合的な定義』 「英語文学世界」。
_____ (1971) 『音韻論と統語論の相互浸透』 「英語文学世界」。